

ひょうご 水百景

No.131-1 加古川（小野市新部町）

～秀吉の軍勢を急造の筏で渡した新部渡し（太閤渡し）～



写真-1 新大河橋から上流を撮影（平成27年5月）

■ 三木城攻めに向かう秀吉軍が渡った新部の渡し

写真-1は、一級河川・加古川に架かる新大河橋（しんおおかわばし：平成6年度竣工・写真-2）から上流を撮影したものです。写真の左端に新宮神社の社叢林が見えますが、この付近にかつて「新部（しんべ）の渡し」があったそうです。

明治時代、加古川には少なくとも17ヶ所の渡しがあったと推定されていて、この渡しも加古川と東条川の合流点付近にあった人渡しの一つです。右岸の新部河岸（かし）には渡し場の詰め所が設けられ、旅籠（はたご）や小料理屋が何軒もあったそうです。左岸側（加東市西古瀬）の渡し場には栈橋が設けられていたとか。



写真-2 新大河橋

昔、高砂から丹波への街道が加古川の右岸を通っていて、高砂⇒黍田（きびた）⇒新部渡し⇒西古瀬⇒社⇒三草（みくさ）⇒清水寺⇒丹波⇒京都といったルートで人々が往来していました。この渡しは、西国巡礼三十三ヶ所※1 札所の「清水寺」（加東市平木）から「法華山一乗寺」（加西市坂本町）までの遍路道でもありました。

※1 西国巡礼三十三ヶ所：観音菩薩を祀る近畿地方2府4県と岐阜県の三十三箇所の札所寺院と三箇所の番外寺院からなる観音霊場であり、日本で最も歴史がある巡礼である。「三十三」とは、『妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五』（観音経）に説かれる、観世音菩薩が衆生を救うとき33の姿に変化するという信仰に由来し、その功德に与（あずか）るために三十三の霊場を巡拝することを意味し、西国三十三所の観音菩薩を巡礼参拝すると、現世で犯したあらゆる罪業が消滅し極楽往生できるとされる。令和元（2019）年度に『1300年つづく日本の終活の旅～西国三十三所観音巡礼～』が「日本遺産」（文化庁）に認定された。

■ 秀吉はなぜ三木城包囲を急いだのか

司馬遼太郎の小説『播磨灘物語』では、三木合戦前の状況を概ね以下のように描いています。

天正 6 (1578) 年 2 月、織田信長から中国・毛利攻めの命を受けた羽柴秀吉は、毛利討伐のために播磨の城主たちを加古川城に集めて軍議を開きます。世にいう「加古川評定」です。この後、別所氏が反織田に踏み切り毛利方につくことになります。と同時に、播州の地侍に対し内々の陣触れを出します。その結果、播州人の 8 割が別所氏に加担することになり、その勢力は合わせて 7,500、これによって播州の情勢は一変します。

姫路城を拠点とする秀吉軍は、別所勢と毛利軍に挟まれることになり（見方を変えれば、別所氏も織田勢と秀吉の軍勢に挟まれている）、秀吉軍 7,500 では毛利が大軍を差し向ければひとたまりもありません。秀吉は、信長に援軍を要請するとともに、毛利の援軍が来る前に三木城を包囲するため、加古川渡河を急いだのです。

天正 6 (1578) 年春、羽柴秀吉が姫路から三木城攻めに向かう途中、加古川において新部の渡しの船頭たちが資材をかき集めて造った筏（いかだ）で秀吉の軍勢を渡したことから「太閤渡し」とも呼ばれています。そして、堤防脇には、写真-3 のような「太閤渡し」と刻まれた石碑が建てられています。



写真-3 「太閤渡し」の石碑

■ 新部村の船頭・山田新介ら、急造の筏で秀吉の軍勢を渡す

姫路を出発した秀吉軍が、新部村の船頭・山田新介らの手を借りて筏を造り加古川を渡ります。

これに対する報奨として、秀吉から渡し舟永代運航の許可を得たことから、後に「太閤渡し」とも呼ばれるようになりました。

「太閤渡し」の石碑には、秀吉が山田新介らに与えた墨付（「太閤様御免状」写真-4 参照）とともに、右のような碑文が刻まれています。

この渡しの名前は、天正六年（一五七八）織田信長から播磨平定の命を受けた羽柴秀吉（のちの豊臣秀吉）が、三木別所氏を攻める途中、ここで河合郷新部村の船頭、山田新介らの手を借りていかだで軍を渡したことに就まりと伝えられています。これに対する報奨として、秀吉は渡し舟の運航を許可し、賦役の免除の墨付（証文）をも与えています。それ以後、現在の小野市と加東郡社町を結ぶ重要な交通機関として昭和四十年頃まで渡し舟の運航が続けられていました。

『加東郡誌』には、三木城攻めに向かう秀吉軍のことが下記のとおり記されています。

① 第 2 編「町村」-第 5 章「河合村」の「新部」の項で

「天正年間、羽柴秀吉中国経略の当時、河合川（加古川）を渡らんとせしも、船なかりせば此の地の住人山田新介というものありて、戸・障子等を集め来りたちどころに、筏をつくりて御用立てたる功勞により、永久渡船の権（権利）並びに諸役免除の恩典を得たりという。播磨鑑に、

一 河合屋敷之事

（前略）天正六年春、秀吉三木の城へ発向の時、当屋敷に逗留ありて云々。

一 河合川 瀧野川より下也 河合郷栗生村（あおむら）の川也

此河も丹波より高砂へ流れて 当国一の大河也

鯉、鮎の名物たり 天正六年寅の春 秀吉公 三木の城へ発向の時

此川を越えさせ玉ふとて

河合川 水の流れは よとむとも いさむ心は はやきもののふ」

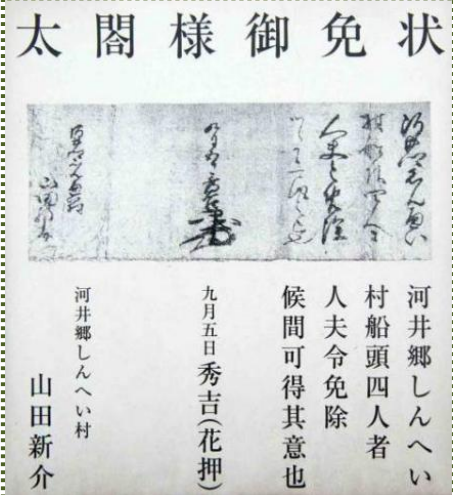


写真-4 太閤様御免状

② 第 2 編「町村」-第 5 章「河合村」の「栗生」の項で「有名なる河合屋敷につきては播磨鑑に、

一 河合屋敷之事

栗生村河合氏が屋敷は代々竹木免許の地也。（中略）天正六年春秀吉三木の城へ発向の時当屋敷に逗留ありて三木の案内ども聞しめさる次手（ついで）に、河合先祖の由来又は赤松吉例（めでたい先例）の次第を申し上げれば出陣の首途に彼の敷にて旗竿を召し上げられたり。終に三木を攻め落して後当屋敷並びに下屋敷の旧跡迄竹木免許せられ（後略）」

③ 第 11 編「名称旧跡」- 15「栗生渡」の項で、「河合村栗生より大部村に渡るわたりなり。今は橋を架けたり、秀吉公三木へ出立の際河合八太郎氏の祖八郎太夫、下人を以て此の渡しを渡さしむ」

④ 同 17「新部渡」の項で、「新部渡は河合村新部より福田村西古瀬に至るの渡場なり、秀吉公三木城へ発向の時此所を渡る、時の船頭山田新介其の功により賦役免除並びに渡守世襲の恩典を受け子孫代々之の業をつぎ当主山田伊兵衛尚之に従事す。其の時の感状とて今尚同家に伝う左の如し。」(写真-4 の墨付の文言が記載されている。なお、この墨付は、兵庫県立歴史博物館に保管されている。)

以上のことから、秀吉軍は「新部の渡し」および「栗生の渡し」(栗田橋付近にあった)の2ヶ所から加古川を渡ったものと思われます。ただ、『加東郡誌』の「名勝旧跡」の七で、「秀吉公三木攻の時五峰山^{※2}(ごぶさん)へ登りて引尾泣尾の山の名を問いたまいていみいみ敷と仰せ有ければ光明寺の院主取り合えず一首を詠みて奉りける。」とあり、宿泊した河合館から約12km北にある光明寺までわざわざ足を運んでいます。意外と余裕があったのかも。それとも必勝祈願？

※2 五峰山光明寺：加東市光明寺にある新西国霊場第28番札所。光明寺は、五つの峰よりなる五峰山にあり、その主峰頂上近くに本堂がある。足利尊氏と弟直義との戦いであった正平7(1352)年(観応3年)の光明寺合戦は、歴史的に有名である。

■ 秀吉の軍勢はどれほどで、それをどのようにして渡したのか

秀吉軍が、別所長治の居城・三木城攻めに向かう途中、新部村の船頭・山田新介らの手を借りて加古川を渡ります。では、その時の軍勢はどれほどの人数だったのか。そして、その軍勢をどのような方法で渡したのでしょうか。

『播磨灘物語』では、秀吉麾下(き)の兵は7,500ですが、「(天正6年)3月28日、秀吉はその兵力のうち三千を率いて三木城に接近した。」とあることから、加古川を渡ったのは3,000ということにします。ただ、前頁に記載の③および④から、秀吉は軍勢を新部渡しと栗生渡しの二手に分けて渡河しているので、新部渡しを利用したのは仮に半数と考えると1,500になります。そして、翌日の3月29日(1578年5月5日)には三木城の包囲を開始、これより天正8年1月17日(1580年2月2日)まで続く三木合戦が始まります。

では、この1,500の軍勢をどのようにして渡したのでしょうか。新部村付近を流れる加古川の水面幅は、比較的狭くなっている所で約50mあります(当時の川幅は不明)。渡し舟でのんびり渡っている時間的余裕はありません。

前頁『加東郡誌』の①によると、「船なかりせば、戸・障子等を集め来り、たちどころに筏^{※2}をつくりて御用立てた」とあります。ただ、船頭が4人いて船がないはずはなく、恐らく船橋を造るだけの船数がないという意味だと思われます。仮に船頭の人数分、つまり4艘の舟があって、1艘で10人を乗せることができ、川幅50mを1往復するのに10分かかるとすると、1時間で240人を運ぶことができます。なので、1,500の兵を渡すには6時間余りかかることになります。



写真-5 『偶田川筏渡ノ図』(国芳作・船橋市西図書館所蔵)
源頼朝が大軍を率いて偶田川を渡るところを描いた浮世絵

では、もっと早く渡すにはどうすればいいのでしょうか。「戸・障子等を集め来り、たちどころに筏をつくりて……」とあるのですが、戸板や障子が浮体の機能を果たすとは思えません。恐らく、丸太や太い竹で浮体（筏）を組み、その上に戸板を並べたのではないのでしょうか（障子は使えるとは思えません）。

そして、この筏をどのように利用したのか。舟の代わりとするなら写真-5 の浮世絵のようになりますが、川幅が50m 程度であれば、筏を対岸まで繋いで筏橋にする方が短時間で渡れるはず。両岸の大木か、あるいは堤防に打ち込んだ木杭に、フジやシラクチカズラ※3の蔓（つる）を捥り合わせたロープを結びつけて、そのロープに多くの筏を繋ぎ、筏橋を架けたのではないのでしょうか。ただ、50m を超えるロープをつくるためのフジやシラクチカズラの蔓が都合よく手に入ったのか、浮体とする丸太あるいは竹が早々に入手できたのか、と考えると筏橋の話はなかなか想像の域を出そうにありません。



図-1 新部の渡し周辺の地図

※2 筏：木材・竹など浮力を持つ部材をつなぎ合わせ、蔓などで結びつけた水上構造物である。戦術・戦略の目的上、行軍で河川を渡らなければならない場合、筏を用いることがある。早急に行動しなければいけない状況下では、本格的に舟を造るより即席性がある筏を造る方が技術的にも時短できるためである。例として、源頼義は前九年の役（1062年）において盾を筏としたと記され、また承久の乱（1221年）では、東軍（鎌倉幕府軍）が宇治川を渡る際、初めは馬を用いたが、後に民家を壊した木材で筏を組んだとされる。

※3 シラクチカズラ：マタタビ科マタタビ属の雌雄異株または雌雄雑居性のつる植物で、落葉性植物。別名、サルナシ（猿梨）。徳島県の祖谷（い）地方では、冬場の山野で採取した自生のシラクチカズラを編み連ねて造られたかずら橋が、祖谷川各所に架けられていたが、今では三好市西祖谷山村の「祖谷のかずら橋」と同市東祖谷の「奥祖谷二重かずら橋」（写真-6参照）を残すのみとなっている。かずら橋の由来は、祖谷に巡行された弘法大師が困っている村人のために造ったという説や、追っ手から逃れる平家の落人が楽に切り落とせるようシラクチカズラで造ったという説など諸説が残っている。

■ 秀吉が山田新介に墨付を与えたのはいつのことか

秀吉が新介に与えた「太閤様御免状」には9月5日の日付がありますが、何年に与えたものかわかりません。通常、日付を書く場合、必ず年を書くはずですが、なぜか記載がなく、墨付の片隅か裏面に書かれているかも、と思い、墨付を保管している県立歴史博物館に問い合わせたところ、以下のような回答がありました。

- ・保管している墨付に交付年の記載はない。
- ・秀吉が新介に与えた墨付は、『豊臣秀吉文書集1』（吉川弘文館、2015年）において、天正10（1582）年6月以前の年末詳文書の中に採録されている（916号）。つまり信長生存中のものという見立て。（本能寺の変：天正10年6月2日）
- ・秀吉は天正13（1585）年7月に関白になっているが、関白が地侍クラスに直接与える様式（直状）で文書を発給するというのは通常ありえない。

・以上のことを踏まえると、感覚的には三木合戦が終わった天正 8 (1580) 年頃がしっくりくるが、天正 6 (1578) 年の可能性も考えられる。いずれにしても良質な裏付け資料がない。

以上のことから、墨付の交付は天正 6 (1578) 年または 8 (1580) 年頃ではないかと考えられます。天正 6 (1578) 年とした場合、渡河は 3 月下旬なので、9 月 5 日の日付と整合しません。天正 8 (1580) 年とした場合、同年 1 月 17 日に三木合戦が終わっているため、9 月 5 日ではかなり間延びしますが、『加東郡誌』②で、三木城落城後に秀吉が粟生村の河合氏に竹木免許を与えているので、山田新介らへの墨付も三木城落城後の天正 8 (1580) 年の可能性が高いと思われます。

いずれにしても、墨付は秀吉が「太閤」となってから交付したものではないようです。因みに、後に天下を取った秀吉が、「太閤」(前関白の尊称) と称するようになったのは、天正 19 (1591) 年 12 月、養子・秀次に関白を譲った後です。また、免状には「人夫令免除」の記載はありますが、「永久渡船の権」はどこにも記載がありません。

■ モノローグ

司馬遼太郎は、『播磨灘物語』において、天正 6 (1578) 年、山中鹿之助が籠る上月城を毛利軍が攻囲する段で、「西播州の山々の裾を割って流れているのが、千種川である。南流して播磨灘にそそぐ。河口に、松原で有名な相生の浦がある。その上流に市川という支流があり、上月城がそれらの山川を要害化して、城楼を組みあげさせている。」とわけのわからないことを書いています。ちょっと地図を参照すればわかるような間違いをしているので、この小説の時代考証も少し不安になってしまいます。

千種川の河口に相生の浦はなく、相生が松原で有名とは聞いたことがない。また、姫路城の東を流れる市川は千種川水系の支川ではない。ついでに言うと、『新書太閤記』を書いた吉川英治もほぼ同ような間違いをしています。

奥祖谷二重かずら橋

徳島県三好市東祖谷菅生の奥祖谷地区を流れる祖谷川に架かるかずら橋。志度合戦に敗れた平家一族が馬場での訓練に通うため、また、追っ手から逃れるためいつでも切り落とせるように「しらくちかずら」で架設したと伝わる吊橋です。かずら橋が 2 本並んで架かっているため、「男橋女橋」とも「夫婦橋」とも呼ばれている。下流側の男橋は、長さ 42m、幅 2m、水面からの高さ 12m、上流側の女橋は、長さ 22m、幅 1.2m、水面からの高さ 4m。右の写真は、女橋で平成 28 年 8 月撮影。



写真-6 奥祖谷二重かずら橋（女橋）

【参考資料】

- 1 『新部渡し跡〜加古川水の新百景』 国土交通省近畿地方整備局姫路河川国道事務所 HP 『話そうはりま』
- 2 『加東郡誌』 加東郡教育会編 大正 12 年 3 月
- 3 『播磨灘物語 (二)』 司馬遼太郎 昭和 53 年 4 月
- 4 『西国巡礼三十三ヶ所、いかだ、豊臣秀吉、かずら橋、舟橋、シラクチカズラ、奥祖谷二重かずら橋』
フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 5 『祖谷のかずら橋』 徳島県観光情報サイト阿波ナビ
<https://www.awanavi.jp/archives/spot/2812>

※発行：令和 3 (2021) 年 8 月 『ひょうご水百景』 No.131

改訂：令和 8 (2026) 年 6 月 『ひょうご水百景』 No.131-1